Press Release

2013年　第29回写真の町東川賞

受賞者発表

受賞式及びフォトフェスタ案内

北海道上川郡東川町

****

＜お問い合わせ先＞

東川町写真の町実行委員会
〒071-1423　北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号　東川町文化ギャラリー
写真の町課・写真の町推進室（担当：竹部・窪田）
TEL.0166-82-2111／FAX.0166-82-4704
http://photo-town.jp/

＊　受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

第29回写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞　対象国:マレーシア

ミンストレル・キュイク・チン・チェー氏（Minstrel Kuik Ching Chieh）

受賞理由：作品プロジェクト「Mer.rily Mer.rily Mer.rily Mer.rily」にいたる一連の作家活動に対して

＜国内作家賞＞

川内　倫子氏（かわうち・りんこ）

受賞理由：「照度 あめつち 影を見る」展（東京都写真美術館、2012年）及び一連の作家活動に対して

＜新人作家賞＞

初沢　亜利氏（はつざわ・あり）

受賞理由：写真集『隣人。38度線の北』（徳間書店、2012年）及び『True Feelings-爪痕の真情。2011.3.12～2012.3.11』（三栄書房、2012年）に対して

＜特別作家賞＞

中藤　毅彦氏（なかふじ・たけひこ）

受賞理由：写真集・写真展『Sakuan, Matapaan - Hokkaido』（Zen Photo Gallery、2013年）に対して

＜飛彈野数右衛門賞＞

山田　實氏（やまだ・みのる）

受賞理由：『山田實写真集　故郷は戦場だった』（未来社、2012年）、写真展「山田實展 人と時の往来―写真でつづるオキナワ」（沖縄県立博物館・美術館、2012年）及び郷土の沖縄を長年にわたり撮影し続けてきた活動に対して

第29回写真の町東川賞審査会委員　（敬称略／五十音順）

浅葉克己　＜あさば・かつみ＞　アートディレクター

笠原美智子　＜かさはら・みちこ＞　写真評論家

楠本亜紀　＜くすもと・あき＞　写真評論家、キュレーター

佐藤時啓　＜さとう・ときひろ＞　写真家

野町和嘉　＜のまち・かずよし＞　写真家

平野啓一郎　＜ひらの・けいいちろう＞　作家

光田由里　＜みつだ・ゆり＞　美術評論家

山崎　博　＜やまざき・ひろし＞　写真家

第29回写真の町東川賞審査講評

高揚感の伴わない政権交代から始まった2013年であるが、経済的な動きに少し変化の兆しが現れ始めた。円安株高の現状に日本経済の今後は果たしてどう展開するのか。震災被害と津波被害、そして原発事故から2年が経過し、今一番の危惧は復興がままならない現状での一般認識の風化ではないだろうか。被災地、そして日本社会の現実から目を離してはならない。そして写真界にもまた新たな風が吹くことを見守りたい。

さて、今年の東川賞の審査会は2月後半に行われた。多士済々、写真家のみならず各界の専門家が集う審査会は、東川賞の大きな特徴であり極めて重要な要素である。毎年ユニークな議論に事欠かない。今年も8名の審査委員全員の出席のもと、議論百出、総ての賞の投票が４対４の真っ二つに割れるなど、緊迫した審査が続いていった。しかし終わってみれば、非常に公平にそれぞれの立場からの議論を交わして各賞は決まっていったといえる。今年も東川賞らしい、幅広い構成からなる受賞者の陣容である。第29回東川国際写真祭もまた充実したものになるだろう。

先ずは国内作家賞。川内倫子氏に決まった。川内氏の世界を言葉にすることには困難がともなう。しかしあえて一言で言えば、光のイメージ世界が喚起する糸口から観客をして様々な人生の局面（光と闇の）に想像力を巡らせうる作品とでもいえようか。強いイメージが連続するわけでは無い、しかしその淡い画面を逍遙するうちにいつの間にか川内流のレトリックにからみとられてしまうのだ。思惑の中から選ばれた偶然。偶然と偶然の積み重ねによって紡ぎ出された必然の感受性。誰にでもある日常の断片を横軸だとすると、その日常から縦軸の時間の流れへふと織り込まれていく。昨年の写真美術館の個展では、野焼きの映像作品もあり川内氏の世界観が丹念にあぶり出されていた。そのタイムリーさが一番際だったのが川内氏であり、国内作家賞に相応しい勢いがある。

続いて新人作家賞。この賞は東川賞の中でも特に議論を尽くす賞でもある。新人賞という性格から、選ぶ側の姿勢が一番問われるからである。今年は初沢亜利氏に決定した。手元にイラクを写した“Baghdad”と昨年出版された東日本大震災の “True Feelings” そして北朝鮮を取材した“隣人”があるが、 初沢氏の写真は一見して分かりやすい。今年はイラク戦争からちょうど10年が経ったわけだが、“Baghdad”に写る開戦前の伸びやかな表情と開戦後の緊張感と違和感。写真に写るその落差にこの戦争の無意味さを感じ、愕然とするしかない。東北の被災地には震災翌日から向かわれたようだ。被災地を撮影することへの自問自答が巻末の文章にある。その一文を読むことで様々な疑問が氷解する。北朝鮮は現在金正恩体制の下ミサイル発射を臭わせ緊張感につつまれているが、2年に渡り震災現場と北朝鮮を行き来し、憶測からではなく体全体で現状を写しだした。その類い希なタフさは新人作家賞に相応しい。

特別作家賞は、中藤毅彦氏に贈られる。「サクアン、マタパアン、Hokkaido」という、アイヌ語で夏が来る、冬が来るという意味のタイトル2巻分冊の写真集が美しい。北海道の夏はまばゆい春を経て、強靭な草木が勢いを増す季節でもある。夕張などのうち捨てられた建物や土地は、すぐに野性的植生に覆い尽くされ自然に戻っていく。中藤氏の撮る北海道は、すでに懐かしさを内包している。氏自身の記憶を思い巡らせながら撮影していることと同時に、風景の一断片から、日本近代の記憶、そしてさらに蝦夷地としての過去に遡及できるからなのだろう。森山大道は自身の撮影する姿勢を擦過と言ったが、中藤氏もまた北海道の風景と擦過することによって土地の記憶を呼び覚ましていくのではないか。特別賞は北海道にゆかりのある写真家に贈られる賞であるが、中藤氏の写真に滲む共感が特別賞として結実した。

続いて飛彈野数右衛門賞。今年は北海道からもっとも遠い沖縄からの受賞である。1918年生まれで今年95歳になられる山田實氏に贈られる。その生い立ちやキャリアについては山田實クロニクルに詳しいが、山田氏は那覇市出身で、東京の大学に進学後就職。そして、満州赴任を経て関東軍に徴用され、終戦時にはシベリア抑留を経験するなど様々な曲折を経たのち1952年に沖縄に帰還した。写真館を開業し、同時に写真撮影を始めた。沖縄の写真界の草分け的存在であり、沖縄ニッコールクラブや沖展写真部門創設など長年にわたり沖縄の写真隆盛のために尽力した。また米軍統治下に本土から来沖した著名写真家の撮影行の案内役も勤めた。一方で基地闘争をテーマにした流れとは一定の距離をおき、子供を中心としたその日常や那覇の町並みを中心に丹念に撮影された。その写真は、往時の貴重な記録であり、希望である。まさに飛彈野数右衛門賞の創設意図に相応しい受賞である。

そして海外作家賞。今年は楠本委員のリサーチからマレーシアのミンストレル・キュイク・チン・チェー氏に贈られる事となった。キュイク氏は中国系マレー人として育ち、台湾留学を経てアルル国立高等写真学校にて修士号を取得する。若い世代の日本人にとってはマレー半島の実情、すなわち政治や宗教についての知識は多くは無い。しかし、戦場として日本が関わったこと、またその後の独立運動や経済的発展に関与した日本の役割については、プラスマイナスの両面を見て取ることが可能であり、そのことの複眼的な理解が求められる。キュイク氏はその経歴より、特にマレー社会の中での中国系家族や自身のアイデンティティをテーマにして制作を行う。プロジェクト「Mer.rily Mer.rily Mer.rily Mer.rily」など、マジョリティとマイノリティの社会構造について静かにそして丹念にシャッターを押し新たな価値観を見ようと制作を続ける。あるがままに対象をみつめるか、見たものを信じることができるか、新たな技術であるデジタル写真のもつ独自の可能性についても、独自の試みを行っている。アジアの真摯でしかも新鮮な息吹に国際賞が授与されることは望ましいことだ。

写真の町東川賞審査会委員　佐藤時啓

第29回写真の町東川賞
＜海外作家賞＞

ミンストレル・キュイク・チン・チェー氏
（Minstrel Kuik Ching Chieh）
マレーシア・クアラランプール在住

キュイク氏は1976年マレーシア北西部の海岸沿いにあるパンタイ・レミスに、中華系マレーシア人として生まれる。中華系であることからマレーシアの国立大学に行く道を閉ざされたため（マレー系住民の経済的地位向上を図ったプミプトラ政策による）、台湾に留学。西洋絵画を勉強した後、フランスに留学し、アルル国立高等写真学校にて修士を取得。現在はマレーシアの美術学校にて教職につく。

スナップショットや演出的なイメージを用いて、家族や幼少時代を過ごした両親の家、自分が暮らす場所を撮影。家族、及び文化的なアイデンティティを写真を通じて探究することによって、そこに新たな意味を創出することを目指している。主なプロジェクトに、地域をとりまくコンテクストとそれが家族構造に及ぼす影響を読み解く「Mer.rily，Mer.rily，Mer.rily，Mer.rily」シリーズなど。デジタル技術がその独自の言語と美学によって、いかに写真や現代の時間と現実をとりまく経験に影響を及ぼすかといった視点からの作品も制作している。

キュイク氏の作品はマレーシアだけでなく、インドネシア、ヨーロッパ（Photoquai 2011）、アメリカ（Houston FotoFest International Discoveries 2009）などでも紹介されている。

＜作家の言葉＞

フランス人歌手ジャック・デュトロンが1966年にリリースした歌「Et moi, et moi, et moi（そして私、私、私）」のことを考える。「7億の中国人、そして私、私、私、私の人生、小さな家」、そう揶揄して彼は歌う。

今では、本国には13億人の、世界中に4億人の中国人が散らばっている。マレーシアにもおよそ700万人いて、国の人口の4分の一弱を占めている。私もその中の一人、マレー系中国人だ。確かに、そのことを考えることもあるし、忘れることもある。私の人生と、小さな家と。

文化的アイデンティティーと社会的ヘゲモニーの論争は、単に数の問題だ。つまり、少数派か、多数派か、ということ。理知的に反論することは、少数派に属することを意味する。写真はいつも、自己定義の複雑さを浮かび上がらせる。何かに属するのか、属さないか。

見たものをどう信じるか。どうすればあるがままに対象を見つめることができるか。それは自分の立ち位置だけでなく、何を見たいかによっても決まる、と私は考える。

第29回写真の町東川賞
＜国内作家賞＞

川内倫子
（かわうち・りんこ）
東京在住

1972年滋賀県生まれ。93年成安女子短期大学卒業。97年に第9回ひとつぼ展グランプリ受賞。2002年、はじめて出版した写真集『うたたね』『花火』（リトルモア）によって第27回木村伊兵衛賞受賞。2005年、パリ・カルティエ現代美術財団にて個展を開催。2009年、第25回ICPインフィニティ・アワード芸術部門受賞。2012年に開催された個展「照度　あめつち　影を見る」（東京都写真美術館）で芸術選奨新人賞受賞。

13年間に撮りためた家族写真を収めた『Cui Cui』（フォイル、2005）や、サンパウロ近代美術館との共同プロジェクトで、日系移民100周年を記念してブラジルで撮り下ろした写真集『時を蒔く／Semear』（フォイル、2007）など、私的な日常や自然の風景を、独自の視線と光の下で切り取った作品は、相互の巧みな構成によって、生と死、光と闇、天と地といった普遍的な要素を浮き上がらせている。初期の頃から一貫して用いられていた正方形のフォーマットの写真から、最近では4×5の大型カメラを使った作品や映像も発表するなど、新たな展開をみせている。写真集、展覧会、ブログ日記など多方面による精力的な活動を続けるほか、国内外での発表も多数。

＜作家の言葉＞

気がつけば写真を始めて20年経ちました。その間まるで飽きることはなくただ目の前にある自分のやるべきことをひとつずつ片付けていたように思えます。その制作行為のひとつひとつが自分の人生をひっぱっていってくれたり、ときに孤独から救ってくれたように思います。

昨年東京都写真美術館で個展を開催させていただきたくさんの方々が来場してくださったことで、自分の作品を他者とシェアすることで生まれるものがあるのだということを改めて気づくことができました。自分の見た景色をまた他者が見る、それを共有することによってお互いが照らし合う鏡のような関係になり、さらにまた見えてくるものがある。この世界はさまざまなものを乱反射しながら共存していてそれをただ自分は見続けていきたいのだと思います。節目の時期にこのような賞をいただき励みになりました。いつも支えてくれている家族と友人、スタッフに感謝します。

第29回写真の町東川賞
＜新人作家賞＞

初沢亜利
（はつざわ・あり）
東京都在住

1973年フランス・パリ生まれ。上智大学文学部社会学科卒業。細江英公主催の第13期写真ワークショップ・コルプス修了。イイノ広尾スタジオを経て、フリーランスの写真家としてファッション、グラビア、クルマ、宝塚歌劇などの撮影を手がける一方で、作品制作も精力的に行う。

2003年2月にイラク戦争開戦直前のバグダッドを訪問、開戦後の6月にも再訪し、戦争の影に隠れて見失われがちな日常の断片を伝える写真集『Baghdad 2003』（碧天舎、2003）を発表。2009年秋には写真集制作のため北朝鮮への入国を申請。2011年から12年にかけて4度訪朝し、メディアにはほとんど紹介されることのない都市や地方の住民の生き生きとした姿を隠し撮りなしでとらえた写真集『隣人。38度線の北』（徳間書店、2012）を出版。また、北朝鮮での撮影と並行し、東日本大震災翌日の3月12日より被災地での撮影をはじめる。翌12年までの一年間、毎月のように被災地に通いながらも、「被災者」といった視点からこぼれ出る人々の生活に向き合おうとした写真集『True Feelings−爪痕の真情。2011.3.12～2012.3. 11』（三栄書房、2012）を出版。

マスメディアによって構築されたイメージではないものを、自らの体験を通して得た「確かさ」によってすくいあげることを試みつつ、「自明性」とは何かを問う作品を発表している。

＜作家の言葉＞

2011～2012、北朝鮮と被災地東北を往復しながら撮影を続けた。「東京＝中央＝メディアの中枢」から見れば、どちらも「極限」と呼ばれる地だ。一見共通項のない2つの現場に降り立ち、見る主体としての「東京」を眺めたとき、沸き上がってくる違和感は同一のものだった。メディア報道に促され世論として定着した「反北朝鮮ナショナリズム」と「震災ナショナリズム」。本来別々に取り組んだ2冊の写真集は、「右傾化する社会心理への警鐘」としての一対を成す。

「北朝鮮人らしさ」「被災者らしさ」があるとしたら、画一化されたイメージを取り払った先の「日常」の中にこそ存在する。受賞写真展では、東京の写真を挟むことで、一見非日常に見える2つの極限を日常の延長線にまで引き戻したい。

写真界の人にはジャーナリストと呼ばれ、ジャーナリストには写真家と呼ばれる昨今。マージナルな立ち位置は必ずしも意図したものではないが、改めて「写真家」として立つ出発点として、新人作家賞をいただけたことを大変嬉しく受け止めています。

第29回写真の町東川賞
＜特別作家賞＞

中藤毅彦
（なかふじ・たけひこ）
埼玉県和光市在住

1970年東京生まれ。早稲田大学第一文学部中退。東京ビジュアルアーツ写真学科卒業。2000年より代官山（後に四谷三丁目に移転）に自主運営ギャラリー・ニエプスを開き、多数の個展を開催する。都市のスナップショットを中心に、ざらついたモノクロームの質感にこだわった作品を発表し続けている。

1995年の展覧会「NIGHT CRAWLER-虚構の都市への彷徨」（コニカプラザ）で生まれ育った東京の写真を発表して以降、東欧の旧共産主義国の諸都市を撮影。ベルリン、ワルシャワ、プラハ、ブダペスト等で撮られた写真を収めた写真集『Winterlicht』（ワイズ出版、2001年）を出版。その後もキューバ、ニューヨーク、上海、ロシアなど世界各地で撮影を行う。2009年には東欧、ロシアと北海道をつなぐ土地といえるサハリンを撮影した写真にて展覧会「ＣＡＸＡＪＩＮ-サハリン」（コニカミノルタプラザ）を開催。2013年には北海道の写真をまとめた展覧会「Sakuan, Matapaan － Hokkaido」（禅フォトギャラリー）を開催。Sakuan, Matapaanはアイヌ語で「夏が来る、冬が来る」を意味する。洗練されたストリートスナップの手法によって撮りおさめられた人物・風景は、独自の世界像を提示している。

＜作家の言葉＞

私は東京生まれの東京育ちですが、北海道の地には少なからぬ思い入れがあります。

まだ幼稚園に通っていた子供の頃、父が単身赴任で釧路で働いていた時期が有りました。

父が休みの週末などは、道東を中心に道内各地に連れて行ってもらったのは良い思い出となっています。

それは、東京育ちの子供にとって驚きに満ちた体験で、今でも自分の原風景のひとつとなって深く刻まれています。

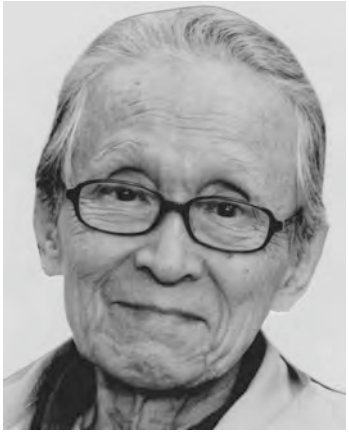
北海道、とりわけ釧路の街は言わば、私にとっての第二の故郷とも思える場所なのです。

その後、長い期間北海道を訪れていなかったのですが、写真を生業にしてからは、折に触れて訪れて撮りためていました。

１９９９年には仲間と東川町文化ギャラリーでグループ展を開催した事もあります。

個展と写真集の形でまとめる事が出来た作品を、他ならぬ北海道の地で賞を受ける事になったのは、この上ない喜びです。

今回、賞に選んで頂き心より感謝しております。



第29回写真の町東川賞
＜飛彈野数右衛門賞＞

山田　實

（やまだ・みのる）

沖縄県那覇市在住

1918年生まれ、那覇市出身。41年明治大学専門部商科卒業。大学新聞編集委員を務め、同年には同大学新聞高等研究科（二部）卒業。日産土木株式会社入社後、満州に赴任。現地で召集され、関東軍に入隊。北満州でソ連軍と交戦中に終戦、シベリアに抑留される。47年に舞鶴に復員し、日産土木に復職後、52年に沖縄へ帰還。那覇市内に山田写真機店を開業。二科会沖縄支部結成メンバー（58年）となるほか、沖縄ニッコールクラブを設立（59年）、沖展への会員参加（62年）、沖縄写真連盟設立メンバー（66年）になるなど、戦後の沖縄写真界の草分け的存在となる。

土門拳のリアリズム運動や、62年に沖縄での取材に同行した濱谷浩から強い影響を受ける一方で、基地や闘争の写真からは距離をおき、子どもや庶民の日常生活を、抑制のきいた距離感と深い共感によって、丁寧に撮りおさめる。

また、72年の本土復帰までは、岩宮武二、濱谷浩、林忠彦、木村伊兵衛、東松照明他、本土の多数の写真家の身元引受人となるほか、東松が主となり沖縄で開催された「ワークショップ写真学校」の窓口も引き受けるなど、本土と沖縄をつなぐネットワーカーとしての非常に重要な役割を担った。

77年に沖縄タイムス芸術選大賞、2000年に沖縄県文化功労賞受賞。2012年には沖縄県立博物館・美術館にて「山田實展　人と時の往来」展が開催されるほか、『山田實写真集　故郷は戦場だった』（未来社、2012年）も出版された。

＜作家の言葉＞

「北と南の出会い」

北海道は私にとって未知の世界です。学生時代の友人に具知安出身の小林君が居たこと。東北観光旅行の際、函館空港に降り船で青森に渡ったこと。私が写真を撮り始めた頃、北海道の沖縄開拓団を取材した写真が雑誌に発表され、撮影者は掛川源一郎氏でした。ニッコールクラブ札幌支部長の橋本博氏とは東京で三度程お会いしました。

十数年前、写真甲子園で地元高校生が準優勝の記事に注目、その後、真和志高校写真部の活躍が新聞に大きく報道される様になり北海道との距離がずいぶん近くなりました。

米軍統治時代、沖縄取材の木村伊兵衛、林忠彦、東松照明各先生方の身元引受人は私でした。濱谷浩先生他、各先生方の案内役を務めながら私の写真勉強が続きました。当時、本土では基地闘争やデモ隊の写真ばかりを報道、沖縄の実情を撮るため農漁村を訪ね、山野を駆け廻りました。写真を撮り作品を発表することが私の長寿の元だと思います。

第29回東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2013～

＜受賞作家作品展＞

会期：8月10日（土）～9月4日（水）　会期中無休

時間：10：00～17：30（8月10日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（8月10日、11日は無料開放）

海外作家賞・・・・・ミンストレル・キュイク・チン・チェー（Minstrel Kuik Ching Chieh）

国内作家賞・・・・・川内倫子

新人作家賞・・・・・初沢亜利

特別作家賞・・・・・中藤毅彦

飛弾野数右衛門賞・・山田　實

●8月10日（土）

14：00～14：30　授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00　テープカット

15：30～17：00　レセプション（受賞を祝う集い）

●8月11日（日）

13：00～17：30　受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査員、ゲスト

■■■　写真の町とは　■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル（愛称：東川町フォトフェスタ）」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートフォトギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真による自然観察講座、町民や初心者を対象とした写真教室、町民写真展など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

■■■　写真の町東川賞規定　■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞　　1名　賞金100万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞　　1名　賞金100万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞　　1名　賞金　50万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞　　1名　賞金　50万円
写真の町東川賞＜飛彈野数右衛門賞＞1名　賞金　50万円
＊2010年に改定により賞金が増額され、新たに飛彈野数衛門賞が創設されました。

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛彈野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する［写真の町東川賞審査会］において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、［写真の町・東川町文化ギャラリー］に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。

2013年 第29回写真の町東川賞 The 29th Higashikawa Awards

受賞作家作品 Award Winners Works

©川内倫子 Rinko Kawauchi

無題 （シリーズ「Illuminance」より） 2007年

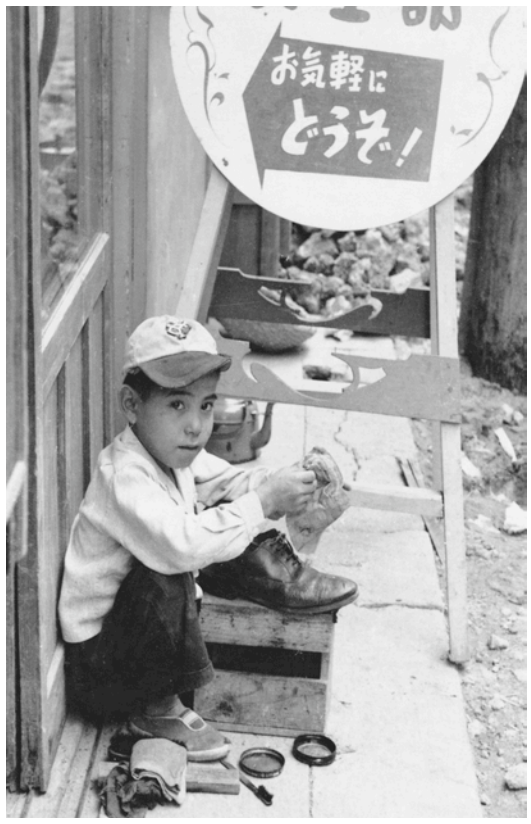
©中藤毅彦 Takehiko Nakafuji

シリーズ「Sakuan, Matapaan – Hokkaido」より

1998-2012年

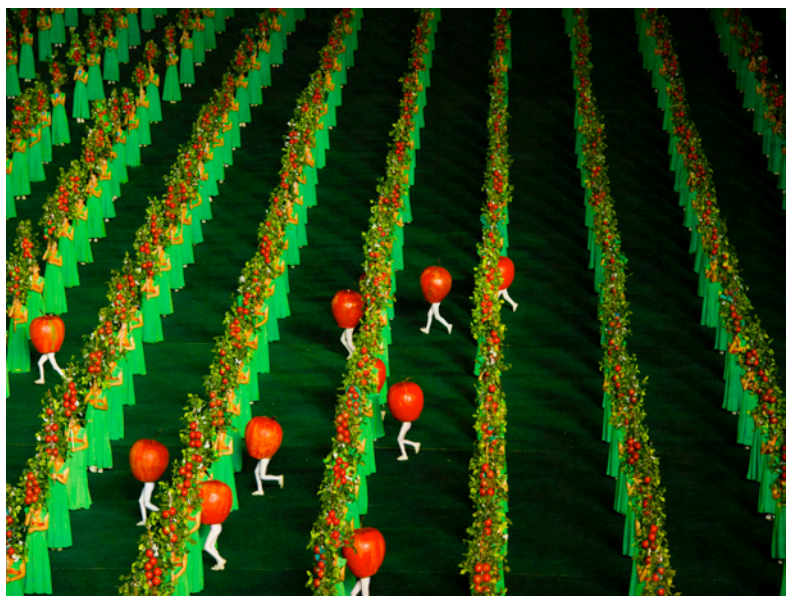
©ミンストレル・キュイク・チン・チェー Minstrel Kuik Ching Chieh

シリーズ「The durian Fanatics より」 2011年



©山田實 Minoru Yamada

靴磨きの少年 那覇市国際通り 1956年



©初沢亜利 Ari Hatsuzawa

平壌 2011年